サン・テグジュペリ (1)

—— 全体と個についての考察 ——

大賀　淳

極限状況の中に身を置いた人々に人間の本質を垣間見て，その意味を探ぐり，それらの人々との連帯感に生きる喜びと希望を湧きあがらせて，その長いとは言えない一生を真摯に生きたサン・テグジュペリは深い思索の人であった。

それは単に理論的思考を展開するのではなく，愛情の籠った心で人間と世界を見詰め，啓示にも似た直観によって事の本質を捉え，その本質の視点に立って凡ゆる関係を統一的に把握しようとする叡智者のそれにも似た思索であったように思われる。

小説というか物語というか，また文明評論というか，とにかくこれらの混在した作品の，「南方郵便機」(Courrier Sud 1928年）から「夜間飛行」(Vol de Nuit 1931年)，「人間の土地」(Terre des Hommes 1939年）を経て「戦う操縦士」(Pilote de guerre 1942年）と，その思索は次第に深まり，宗教的思惟にまで至るのであるが，「王子さま」(Le petit prince 1943年）に詩的開花をみせて，サン・テグジュペリはその一生を終るのである。

これに平行して六年あるいは八年位にわたって，未完に終ったとはいえ読む者を強く引きつける——誤解や反撥や軽侮をも招き評者の分かれるところであるが——啓示ともみえる珠玉の言葉がちりばめられた「城砦」(Citadelle 1948年）を書きつづけるのである。

2　サン・テグジュペリ　(1)

サン・テグジュペリは丁度20世紀の始まった西暦1,900年に生れた。

緩慢で制限された交流はあったとはいえ，今まで各地域にわかれてその歴史を辿っていた世界が，一つとなって動き出す激動の20世紀前半に，その動乱と苦悩とをまともに身に受けて，彼の望んでいた愛と連帯の世界を見ることもなく，また祖国フランスの解放と勝利をも見ずに，自分が生命を賭して愛し抜き，そこから貴重で特殊な経験と，その経験を通して思索し見事な思想を得た天職とも思われる飛行機の操縦士として44才の生涯を大空に閉じるのである。

1914年に始まる第1次世界大戦，1917年に始まるロシヤのソヴィエト革命，世界的大不況と1933年ヒットラーのまたムッソリーニのファシズムの抬頭，スペインの内乱そうして1939年の第2次世界大戦勃発という大動乱と破局；そうして価値観の顛倒とそこから造り出されれる新しい体制，それに呼応して或いは付和雷同し或いは防衛のために罵り攻撃する，そこに人間の功利的欲望が露骨にむきだしになって道徳も理想も陰にかくれる世界，またイデオロギーの相剋が人間相互の不信と憎悪に拍車をかけて，血で血を洗う殺戮と破壊の修羅場をみて，サン・テグジュペリは人間とは，愛とは，正義とは，自由とは，秩序とは，祖国とは……等々と問いつづけその窮局の姿を思索しつづけたのだと思われる。

少年時代から引きつづいてこの様な極限状況を呈示する世界の動きの中で，その世界的極限状況に大きく包まれながら，サン・テグジュペリ自身もまた個人的極限状況——カップジュピーの砂漠の中での飛行場長とか航空事故によるリビヤ砂漠への墜落など——に，しばしば身を置くのであった。

そういった状況の中で，鋭い感受性と誠実さと瞑想の性癖を持っていたと言われるサン・テグジュペリはモラリストとしての強い一面をのぞかせて，思いに耽り思索しつづけるのである。

彼がモラリストであったということと，その作品とをみてみると，彼

の心の中に常にあった問題は，人間とはなにかという個の問題，個と個の問題そうして個と全体の問題であった。

両次世界大戦の悲惨と道徳や精神の荒廃は勿論のことであるが，ヨーロッパ，デモクラシーと世界を震撼させるコミュニズムとファシズムの抬頭は，サン・テグジュペリにとっては個・個と個・個と全体の問題を深く考えるのに，理論と実際の両面で多くの示唆を与えるものであったと思われる。

「南方郵便機」は1927年から1928年にカップ・ジュビーの飛行場長として，敵意に満ちた部族に取りまかれている砂漠の中という一種の極限状況の中で書かれた。その物語の内容は飛行機の操縦士の恋であり，一つの極限祝状に身を置いて郵便物を無事に送り届けるという職業を通じて，まだ本人ははっきりと意識していないが，「真の人間」——サン・テグジュペリの考える l'Homme である——の価値を実現しようとするものである。

「夜間飛行」は1928年の秋，アエロポスタル・アルジヤンテイナの航空路線開発主任に任命されてブエノス・アイレスとアルゼンティン最南端の町プンタ・アレナスを結ぶパタゴニア線の開発の経験から書かれるのである。

夜間飛行というその当時は着手され始めたばかりの危険な冒険であった。物語はこの危険な夜間飛行に加えて更に暴風雨という極限状況が設定されている。

そういった極限状況を乗り越えて，限られた存在である人間と対比してより永続する何か真実なものを見出そうとする人々が描かれている。

このようなある極限状況の中で生きる人々が生の真実を追求しつつ何かを見出して，それに一身を捧げる姿に，人間の真実と美しさと意義とを感得したサン・テグジュペリは，普通の状況の中でもっと一般的で普

遍的な人間のあり方・存在というものについて，思索を拡げようと考えたに違いない。そういった動機があって上記の二作を発表し終えた頃から「城砦」に手をそめ始めたのではないかと思われる。

この「城砦」が書き始められた時期については1936年と，1938～9年という二説があって，その証言と論考[(1)]があるが，サン・テグジュペリがこれについては何も触れていない以上定かではないが，やはり「南方郵便機」・「夜間飛行」と発表されて，「人間の土地」が書かれ出版された頃に書き始められたようである。

そうなるとこの「城砦」と平行して「戦う操縦士」と「手帖」（Le Cahier 1939年～1944年にかけて備忘録）と「王子さま」が書かれるわけである。

この頃1938年に南米フェゴ諸島への長距離飛行の途中，グァテマラで事故にあって重傷を負い，ニューヨークで静養した。ここで「人間の土地」が書かれ，フランスで出版された。

これは一つの人間論，文明論であって，のちに「戦う操縦士」や「王子さま」，それに「城砦」などにおいて深化して展開される基本的なものがここに示されている。例えば友愛，連帯意識，精神の風などがそれである。

そうして1942年にアメリカで出版され賞賛を博した「戦う操縦士」において，この人間論は宗教的な深さをもって一層深化されるのである。

サン・テグジュペリの作品，思想さらにはその政治的立場についてまで，勿論多くの論評が書かれており，したがってサン・テグジュペリについて幾つかの人間像が描き出されているわけで，論者の立場の相異から相反するサン・テグジュペリ像もあるわけである。その相異を招く由縁は多く「夜間飛行」のリビエールの人物と，「城砦」によるところが多いと思われる。

リビエールは，自ら造り出すとはいえ極限状況に於いての使命遂行という事態に適切に対処しなければならない人物である。これはそのために，自らを鍛え，他を鍛えあげなければならないという立場の人物の自己抑制の姿であって，ここにサン・テグジュペリの全体主義的，専制主義的傾向をみるのは性急な態度であろう。

また「城砦」においては，矛盾するかにみえる章句があって，誤解を招きやすい面があるが，これは「城砦」が未完のものであり，内容の構想は別として，作品の構成さえまだ手がつけられていなかったものを，サン・テグジュペリの死後，刊行者の多くの労苦の末出版され，今日我々が読むことが出来るようになったことを考えると，この作品からサン・テグジュペリの全体像を性急に描き出すことは不謹慎なことと思われる。

また「手帖」にはヨーロッパ・デモクラシー，コミュニズムおよびファシズムに対する論評と批判がみられるが，サン・テグジュペリが全体の問題を思索する時，直ちに現実の政治体制あるいは社会体制としてのそれを思い描たと考えるのは真違いであると思われる。

したがって，「城砦」における族長制社会という体制が即サン・テグジュペリの描いた政治体制，社会体制ではないであろう。

しかしまた，現実の政治体制，社会体制とは別に，人間存在の在り方を問うた精神面の世界だけを，そこに読みとろうとするのも即断ではないかと考えられる。

形式と内容は本来不可分のものであり，ここにサン・テグジュペリがその思想内容の形式的実現として族長制社会を撰んだものと思われる。

「なぜなら様式とは魂であるからだ，そうして人間はおのれの様式を鍛えることによってしか，この魂を創造することはできない。」[(1)] と彼自身「手帖」のなかで述べている。

とにかく，人間とは何か，人間とはいかにあるべきかについて，幾度か

の重傷によって傷ついた肉体と，フランスあるいはアメリカ在留フランス人の間での中傷や誹謗によって人間関係のなかでも傷つけられた精神と，この両方の疲労の中で，サン・テグジュペリは必死に思いつづけ，「城砦」として書き綴るのである。

それは個の問題であり，個と個の問題であり，個と全体の問題であった。

この点についてサン・テグジュペリの作品にそって考えてみたいのである。

「城砦」の中で次の様な言葉がある。「私は，民たちを隷属させるために，帝国を一個の神となしたことはなかった。私は民たちを，帝国の犠牲とはしない。民たちを帝国で満たし，帝国によって生気づけるために，帝国を築くのである。私にとって，民は帝国よりも重要である。民たちをつくりあげるために，私は彼らを帝国に従わせるのだ。帝国を築きあげるために，彼らを隷属させたのではないのである。それゆえにこそ，なにものへも導くことなきかの言語，原因と結果とを，主人と下僕とを区別するかの言語を棄て去るがよい。思うに，存在するのは，相互関係，構成関係，内的な依残関係だけなのである。[2]」

ここに彼の考えた全体と個の問題が要約されていると思われる。

彼は一つの全体像を帝国とか寺院とか樹木とか船とかで表現する。それは様々な諸関係がある秩序によって一つの統一体として構成された世界である。

その秩序とは「戦う操縦士」の中で思索された l'Homme（真の人間）の体現者としての王を頂点に戴いた族長制社会即ち階層的秩序である。そうしてこの帝国という全体はこの階層的秩序によって，ゆるみなく構成された社会である。

それは外面的に見るならば，前近代的，封建的，専制的あるいは機械

的全体主義の社会である。

だが内面的に見るならば，各個の地位の自覚と全体への奉仕の精神という内面のモラルによって裏打ちされるべき自制的,克己的社会である。

したがって，どこかでこの自覚と奉仕という内面のモラルに弛みを生じた時，全体が忽ちに崩壊し始める緊張した社会である。

この「城砦」はまさにその崩壊を前にした，王の説喩と警鐘の語録である。

サン・テグジュペリが「思うに存在するのは相互関係，構成関係，内的な依存関係だけなのである。」と王に言わせるように，それぞれの関係の結び目として個はあるのである。「城砦」の中に網についての比喩があるように，一張の網があり，それが全体を表わすとすると，個々の人間はその網目の結び目であり，どこか一本の網糸が切れるとき，それに連らなる結び目は用をなさなくなり，その存在価値も無くなり，さらに次々と連鎖反応を起して全体の網もまた，無用と化するのである。

このように全体と個は緊密に結びつき，全即個あるいは個即全の関係を示すわけである。しかもこれは文化と伝統とを世代から世代へと譲り渡して行くべき社会である。

それは空間的にも時間的にも緊密な断絶のない緊張感と精神的密度の極めて高い社会である。

彼はまた「城砦」の中で次のように反証するのである。

「かの馬鹿ものどもは，いくたの対立が存在するかのように思い込んだ。……ところが人生において，もろもろの関係が織りなす網目は，もしこの対立する両者の一方を根絶するなら，おまえ自身が滅び去るようにできているのだ。私に言わしめれば，なにごとによらず，そのなにごとかに対立するものは死であり，死にほかならないからである。……隷属に抗して戦う人間がその一例である。愛に呼びかけて自由のために戦うかわりに，彼は憎しみに呼びかける。あらゆる階層的秩序のなかには，

いたるところ隷属が跡づけられる以上，かつまた天空によじ登ろうとする高貴な石材が拠りどころとする寺院の土台の役割りさえ，おまえは隷属と呼びなすことができる以上，当然の成り行きとして，おまえは寺院を毀つより仕方がなくなるのだ。[3]」

サン・テグジュペリの言う相互関係・構成関係，内的依存関係という諸関係は階層的秩序によって生ずるものであり，またこの諸関係があるゆえに，必然的に階層的秩序ができあがると考えられ表裏一体をなすものである。「城砦」の中で次のように述べている。

「ある形姿に服属するなら，おまえたちのあいだには階層的秩序が存在することになる。そのとき，おまえたちの重要性が，おたがいにとってあらわになるのだ。階層的秩序がないなら，兄弟というものもない。[4]」

この階層的秩序とは非常に重要な問題であり，サン・テグジュペリの思想を知るうえでその基幹をなすものと考えられる。「城砦」が未完に終ったのでこの問題が充分に解明されなかったと思われるのであるが，しかしサン・テグジュペリの内心ではかなり検討されたがゆえに族長制社会という構想を択んだものと思われる。

階層的秩序における諸関係即ち相互関係，構成関係，内的依存関係というものは位相による関係である。

親と子，師と弟子，王と臣下，兄と弟，夫と妻，先輩と後輩といったように，それぞれ位相を異にするものが，相互に結び合う位相関係である。

そこには，人間と人間という単なる平等あるいは対等の関係は存在しない。各個は「人間」という平等な普遍的本質を有しながら，現実の世界の中では各々位相を異にし，平面的な単なる平等の存在ではあり得ないわけである。

これについて，サン・テグジュペリは「手帖」や「城砦」で次のように述べている。

「平等は自然の秩序のなかにはない。もっとも強い，もっとも知力のある動物が王として君臨するのだ。もっとも強き，もっとも知力ある人間もまた同じである。キリスト教から生れた平等（各人はそれぞれ神の面影を宿しているという），ついで後に幾多の哲学者たちが考えた平等は再び発見された真理ではなく思想（Concept）である。それはそれ以前の文明には見られずその後の文明の出発点，いうなれば精神の置土産による人間の播種となっている。[5]」

「もし正義が平等という点にあるとするなら，私は自分が不正義であることを識っている。[6]」

「正義と平等。それは死である。だが友愛は樹のなかにしか見出されない。おまえは結縁と共同とを同一視してはならぬ。共同とは支配する神なき混淆にすぎず，灌漑でも，筋肉組織でもない。したがって腐朽である。けだし彼らは，完全なる平等と，正義と，共同とのなかで生活したことにより，おのれを崩壊せしめたのである。それは，混り合った撞球の球の静止状態である。樹の不正義のなかに吸収されるがごとき種子を，彼らに投げ与えるがよい。[7]」

「確かに，おまえの生成の芽を枯らせ阻む階層的秩序は不正なるものである。だがしかし，おまえはかかる不正と争って，構築物を次々と破壊してゆけば，遂にはかずかずの氷河の水が入り混るよどんだ沼にまで行きつくであろう。おまえは，平等性と同一性とを混同して，人々が互いに似通っていることをのぞんでいる。だが私は，彼らがそんなにも似ているからではなく，同じほど帝国に尽しているからこそ，彼らが平等であると言いたいのだ。[8]」

「おまえの顰蹙を買うことは覚悟のうえで，私はつぎのように言おう。友愛の条件はけっして平等ではない，と。けだし友愛とは報償であり，平等とは，神のうちにおいて作りなされるものだからである。樹木についても同様である。樹木とは階層的秩序なのだ。樹木の一部が他の

部分を支配するなどということを，おまえはいったいどこにおいて眼にするのか。寺院についても同様である。寺院とは階層的秩序なのだ。[9]」

このようにして，ヨーロッパ，デモクラシーとコミュニズムに失望と不満を漏らしているサン・テグジュペリは自由と平等の謳歌に，不正義と罵しられることを承知のうえで，階層的秩序に「真理」を見出すのである。

したがって，階層的秩序は自然で必然的なものであり，逆に言うと，これを捩じまげるのは不正義なわけである。

しかも，この位相関係の網目の中で，各個はその位相を変化させて行く。子はやがて親となり，その子と親子の関係を結ぶ。弟子はやがて師となり，その弟子と師弟の関係を結ぶ。そうして世代から世代へと，その諸関係が運び行く文明を伝統を伝えていくのである。「手帖」の中でサン・テグジュペリは，「文明とは或る一つのものを長時間守りつづけることにあるのだ。[10]」と述べている。それは，階層的秩序の社会以外には無理なことであろうと思われる。

また各個が位相を変化させて行くということは，この階層的秩序の社会が外面から見るような，拘束と不自由による静的社会ではなく生成と発展を内に孕む動的社会でもあることを示しているのである。

しかし，現実の問題として考える時，このような階層的秩序の社会をこの秩序に堪えて，構成することのできる完全な個とは，サン・テグジュペリの言う内的，精神的に充実した密度の高い l'Homme のみであり，あるいはこの l'Homme の実現を志向し得る個のみであり，したがって，この l'Homme あるいはこれを志向し得る個でなければ，完全に維持し得ない社会である。

それゆえに，この階層的秩序の社会はサン・テグジュペリの理想の園であり，この地上に実現する可能性の極めて薄い，というより不可能な社会である。

サン・テグジュペリは現実と理想の狭間で悩みの時（生涯）を過したのだと思われる。したがって，ここに彼の政治思想とその立場を読みとることは早計であると思われる。この是非は別として，サン・テグジュペリはまた次の様に述べている。

「秩序とは生命の結果であって，その原因ではない。秩序とはある強力なる都市のしるしではあるが，その起源ではない。生命と情熱と，あるものに向かう心の傾きとが秩序を創造する。しかし，秩序とは，生命をも，熱情をも，あるものに向かう心の傾きをも創造することはない。」(11)

秩序は生命の足跡であり，生命が動きだすとき自然に形に現われたものであり，この秩序によって生命が傷つけられることはなく，逆に生命を鍛えあげ，よりよき創造を実現させる契機になるものと考えているのである。したがって生命の本然が姿を現わすとき，階層的秩序として現実化すると考えるわけである。サン・テグジュペリは前述の「樹木とは階層的秩序なのだ……」と言って全体を喩えるものとしてこの樹木を引き出すのであるが，これは彼が階層的秩序を自然の生命の摂理の現れとして理解していたものと思われる。

一方，自由の問題であるが，それはこの階層的秩序の中で，己れの職分を全うし，人間の本質を全力を傾け，生命を賭して湧出させる個こそサン・テグジュペリの言う自由な人間である。そうしてここにこそ自由があるのである。彼は次の様に言っている。

「抗うことの出来ぬ磁場のなかで，目に見えぬ警吏なる抗うことのできぬ拘束のなかで，完全に自由である人間，これこそ，わが帝国の正義なのだ。」(12)

「私のいう自由とは，わが拘束の生みなせる果実を使用することにほかならず，かつまた，わが拘束のみが，ひとり，解放されるに値いするものを築きあげる力を有するのである。信念を曲げることを断呼拒否し，おのが心のうちにおいて，暴君と死刑執行人の命令に服しようとし

ないことによって，責苦のうちにありながら自由なる者であることが明らかとなる人間，かかる人間をこそ，私は自由なる者と言おう。また，卑俗な情念に服さぬ人間をもまた，自由なる人間と言おう。[13]」

ここで，今までに何度も出てきたl'Homme あるいは人間の本質ということであるが，「戦う操縦士」の中で25章以降においてサン・テグジュペリはいろいろな面からこの大文字で書かれる言葉について述べている。一応「真の人間」と訳すことにすると，この「真の人間」は，

「今ふと心に浮かぶこの比喩が適切か否かは知らないが，とにかく，僕は自分に向って言いきかせたものだ，〝個人は道でしかない。〟と。重要なのは，その道を借りる真人間だけなのだ。[14]」と語り，また「城砦」で

「思うに，おまえが存在するためには，お前がその一部をなす樹木そのものの伸びゆくことが肝要である。お前は運搬であり道であり過程であるにすぎぬ。私はおまえを信ずるためにはお前の神をみたいと思う。[15]」と述べるように，肉体をもってこの世界に現れている個々人の奥に実在する「真の人間」を指すのである。それは常に個人のうちに姿を現わすとは限らないし，個人の知性とは同一のものではない。ある場合には姿を消して個人をして暗黒の道にさまよわせる。しかし，その個人の「自己」であり，同時に各人に共通の普遍性を有する存在である。

「今朝まで僕は，口やかましい管理人だった。あれが即ち個人という奴だ。ところが，〝真人間〟が姿を現わした。これが，あっさり僕の位置に腰をおろした。[16]」

とサン・テグジュペリが「戦う操縦士」で述べるのはその間の事情を言い表わしているのである。

この「真の人間」に対して個とは，その「真の人間」が通る道であり殻であるに過ぎない。

ここには肉体と霊魂の問題があると考えられるし，l'Homme という永遠なる価値存在は霊魂の永遠不滅性を指し示すものとも考えられるがサン・テグジュペリの宗教観の問題と共に一応措いて，ここでは触れないことにする。

ここで，個と全体とは，どのように結び合い関係し合うかをサン・テグジュペリにとって非常に重要な観念である「犠牲」の面から，もう一度みてみたい。

「ところが，僕の属する文明は，人間関係を，個人を超越した「真人間」尊崇の上に築こうと努めて来た，かくすることによって，各自の，自身及び他人に対する行いを……自由な愛情の流露たらしめようとしたのである。[17]」

「僕の文明は，〝神〟から承け継いで，各人に全人間の責任を負わせ，全人間に各人の責任を負わせた。一個人は一集団の救済に身を犠牲にしなければならない。但し，これは愚劣な算術の意味ではない。それは個人を通じての〝真人間〟に対する尊敬の意味だ。要するに，僕の文明の偉大さは，埋没した一人の坑夫の救出に，百人が一身を犠牲にする義務を持つ点にある。彼等は〝真人間〟を救出するのだ。[18]」

と「戦う操縦士」の中で述べられているように，個は全体（社会・共同体）のために身を捧げてその個の奥に内在する「〝真の人間〟を顕揚し，また全体（社会・共同体）は個の奥に内在する「真の人間」を救出するために生命を賭するという一心同体の如き緊密な相互関係のもとに全体は強固な統一体となるのである。

そうして「城砦」のなかで，

「犠牲がもっとも速やかに償われるのは良きことである。だが私は犠牲があまりに早く，必要なものであるのを止めることを望みはしないのである。思うに，犠牲とは，上昇の条件であり，しるしであり，道であ

る。[19]」

と述べられているように，犠牲とは単なる無償の行為ではなく，献身であることによる自己変革であって，自己を捧げて l'Homme を引き出すことである。即ち新しい価値を引き出し創りあげることである。サン・テグジュペリの交換の考え方によるところのものといえる。

個とは個として存在し得るのではなく，個と個との結ばれによって，全体のうちに存在するのであって，種々の位相的相関関係の中で存在たらしめられるわけである。

サン・テグジュペリは次の様に言っている。

「主なる神よ，私をふたたび，私が属する樹木にお結びください。ただ独りいるとき，私はもはやなんの意味も持ってはいないのです。みな私にもたれかかって欲しい。私も他の者にもたれかかりたい。あなたの階層的秩序によって拘束されたいのです。……私は存在したいのです。[20]」

「けだしおまえは，かずかずの関係の結び目である，おまえがまさしくおまえであるのは，この顔貌，この肉体，この特質，この微笑に基くのではない。おまえを通して築きあげられたなんらかの構成に基くのだ。おまえに属し，またおまえを作りあげている，そとに現われたなんらかの面ざしに基づいているのだ。かかる面ざしの統一性は，おまえを通して結ばれている。だが逆に，おまえは，この面ざしに属しているのだ。[21]」

こうして多様な個と個との位相的相関関係が階層的秩序を作りあげ，全体を構成するのである。したがって個と個の関係は個と全体との関係であり，個は全体を背負い，全体は一つの個をもないがしろにできない緊密な連帯関係のうえにその全体像を表わすわけである。

註

(1) ――「城砦」の成立過程をめぐって―― 杉山毅　広島大学文学部紀要32巻2号（1973年）。

(1)′ STANT-EXUPÉRY
Carnets (Paris, Gallimard, 1953) p. 119.

(2) SAINT-EXUPÉRY
Citadelle 〔47〕 Œuvres, Bibliothèque de la pléiade, Paris, Gallimard 1959) pp. 772～773.

(3) Ibid. 〔121〕 pp. 772～773.

(4) Ibid. 〔132〕 p. 791.

(5) SAINT-EXUPÉRY
Carnets (Paris, Gallimard 1953) pp. 64～65.

(6) SAINT-EXUPÉRY
Citadelle 〔107〕 (Œuvres, Bibliothèque de la pléiade, Paris, Gallimard 1959) p. 739.

(7) ibid. 〔116〕 p. 764.

(8) ibid. 〔207〕 p. 962.

(9) ibid. 〔152〕 p. 828.

(10) SAINT-EXUPÉRY
Carnets (Gallimard 1953) p. 50.

(11) SAINT-EXUPÉRY
Citadelle 〔140〕 (Œuvres, Biblicthèque de la pléiadə, Paris, Gallimard 1957) p. 806.

(12) ibid. p. 806.

(13) ibid. 〔101〕 p. 731.

(14) SAINT-EXUPÉRY
Pilote de guerre (Œuvres, Biblicthéque de la pléiade, Paris, Gallimard 1959) p. 369.

(15) SAINT-EXUPÉRY
Citadelle 〔197〕 (Œuvres, Bibliotheque de la pléiade, Paris. Gallimard 1959) p. 921.

(16) SAINT-EXUPERY
Pilote de guerre (Œuvres, Bibliothèque de la pléiade, Paris, Gallimard 1959) p. 371

(17) ibid. p. 373

(18) ibid. p. 376.

(19) SAINS-EXUPÉRY
Citadelle〔198〕(Œuvres, Bibliothèque de la pléiade, Paris, Gallimard 1959) p. 925.

(20) ibid. p. 869.

(21) ibid.〔194〕p. 915.

文 献

「サン・テグジュペリの生涯」山崎庸一郎 新潮社 昭和46年。

「星の王子とわたし」内藤濯 文藝春秋社 昭和43年。

「城砦」の成立過程をめぐって 杉山毅 広島大学文学部紀要32巻2号 (1973)。

Luc Estang saint-Exupéry par lui-même "Ecrivains de Toujours" aux Editions du seuil 1970.

Pierre Chevrier Saint-Exupery notes et documents de Michel Qnesnel Paris, Gallimard 1971.

R.-M. ALBÉRÈS Saint-Exupéry Paris,Editions ALBin Michel 1961.

Andre-A. Devaux Saint-Exupéry Paris, Pescleede Brouwer 1965.

カーテイス・ケイト「アントワーヌ・ドゥ・サンテグジュペリ」山崎庸一郎 渋沢彰訳 番町書房 1974年。

ルネ・ドランジュ「サン・テグジュペリの生涯」山口三夫訳 1963年。みすゞ書房

日本語訳文は次によって引用させてもらいました。

「戦う操縦」士堀口大学 新潮社

「手帖」 宇佐見英治 みすゞ書房

「城砦」 山崎庸一郎 粟津則雄 みすゞ書房